

# 芭蕉発句「丈六に陽炎高し石の上」について

米谷 巖

(一)貞享五年の春、伊賀上野の近郊にある新大仏寺を訪ねて得た句であるが、まず参詣の時期について検討する必要がある。芭蕉はこの春、陰曆二月四日から同月十七日までの間、伊勢に滞在していたことが当時の書簡等によって明らかである。また三月十九日には、郷里を立って吉野に向かっている。したがって寺参りをしたのは、

正月以降吉野へ出発する以前で、かつ伊勢逗留の期間を除く間ということになる。そこで「陽炎高し」の句の印象から推して、伊勢から帰郷後の晩春、三月のころと従来一般に考えられてきた。

しかしそれならば、芭蕉が伊勢からもどった直後の二月十九日以降は、吉野へ同行するため杜国が伊賀上野に来て逗留しており、なにかんづく三月中は苔蘇の瓢竹庵を借りて二人で同居していたはずであるにもかかわらず、彼を新大仏寺に誘った形跡がないのは不審である。参詣直後伊賀で書いたとみられる俳文「伊賀新大仏之記」には、「ことし旧里に年を越て、旧友宗七、宗無ひとり二人さそひ物して、かの地に至ル」(蕉翁文集)とあるが、その他に同伴者があつた様子はない。そういえば、「ことし旧里に年を越て」という言い方も、越年して数か月も経た時点での行動ないし執筆とすれば、やや不自然な感じをぬぐえない。年明けてまもない頃のことであれ

ば、「ことし旧里に年を越て」とことわる気持ちももうなすげよう。また前記俳文に「仁王門・撞樓の跡ハ、枯たる草のそこに隠れて」とあるのも、古刹の荒廃ぶりを強調せんがための修辭的意圖が考えられるものの、晩春の情景描写としてはやはり適切を欠くと言えよう。

『蕉翁全伝付録』には、「いせ」で詠んだ発句九句と、その直前に「丈六」の句を一紙にしたためた真蹟の模写を収める。同書の伊勢の句が、『笈の小文』のそれとは配列を異にし、ほぼ制作の順序に記されているとみられることから推して、それら伊勢の句群の前に記されている「丈六」の句は、伊勢旅行より前に詠まれたものと考えられる。また、後で述べるように発句の推敲経過から推しても、新大仏寺参りは伊勢へ赴く以前でなければならぬ。

伊勢下向の前として、それはいつか。新大仏寺が上野と伊勢の津を結ぶ伊賀街道にあることから、二月切め伊勢へ向かう途中に立ち寄つたという可能性も一応考えられる。しかしこれも後述するように、伊勢下向以前に「丈六」の句が伊賀の門人に披露され、前引の俳文の初稿も書かれたとみられるので、否定されよう。また年明けから正月十日すぎまでは、伊賀の門人間の初句会等に度々招かれて

いるようであることを勘案するに、一月半はすぎから下旬の間とみれば、ほぼ当たっているのではなからうか。したがって「丈六に陽炎高し」とは、芭蕉が演出した虚構であって、事実は余寒なお厳しいころ（この年立春は正月四日である。）、枯草に埋もれた廢寺を訪ねたものと思う。

(二)この句には、伝えられる句形に種々の異同があるため、推敲過程についていくつかの説があるが、私なりに次のように考えてみたい。

土芳の『蕉翁句集草稿』には、「丈六」の句に付して、「又、かげろふに佛つくれ石の上」と云句有。人にもきかせて後、かげろふ高し、(きはら)と注記している。『三冊子』(赤さうし)にも、

丈六のかげろふ高し石のうへ  
かげろふに佛つくれ石の上

と両句を掲げて、「此句、当国大仏の句也。人にも吟じ聞せて、自も再吟ありて、丈六のかたに定る也」(稻馬)と付記している。また日人筆写の『芭蕉翁全伝』(文化元年成)にも、両句を並記して、ほぼ同趣旨の注記をしている。これら土芳によると、「丈六」の句には当初「佛」の句の別案があったことがわかる。ただし竹人筆の『芭蕉翁全伝』(宝曆十二年成)だけは、まず「佛」の句を挙げて、「此句、後、丈六に陽炎高し、と改る」と付記して、「佛」の句を「丈六」の句に推敲改作したかのように述べている。しかし両句は初案とその改案の関係というよりも、三冊子などの文面にうかがえるごとく、ほぼ同時に浮かんだ別案とみるべきであろう。

「佛つくれ」の句は、ゆらめく陽炎の裡に、在りし日の仏像の幻影を見ようとした芭蕉の情念を端的に表白していて、当初のモチーフにより、忠実な表現であったと考えられる。「佛つくれ」は、「丈

六」の句に比べて主観があらさまで形象性に劣るが、作者としては執心するところがあって、取捨を決めるにさいして、「人にも吟じ聞せて」意見を徴したのであろう。その結果、「佛」の句は捨てられ、「丈六」の句だけが残されたのである。

別案「佛」の句形について、日人の全伝は、「かげろふや、佛つくれいしの上」としている。上五「かげろふや」の「や」は、眼前のゆらめく陽炎に向かって、あたかも「陽炎よ」と呼びかけているような気味がある。その意味では「佛つくれ」とあつらえ望む対象が明示されていて、句意が通りやすい。しかしこのばあいは、そのことが却って誤伝の可能性を思わせる。また中七も「佛つくれ」としているが、句形の異同に慎重な態度のうかがえる蕉翁句集草稿および三冊子の「佛つくれ」を信頼すべきであらう(尤も、全伝も、「つくれ」と強いて読めばよめぬでもない字体である)。全伝は、「丈六」の句についても、下五を「砂の上」と誤るなど、書写態度に杜撰なところがある。また竹人の全伝は「陽炎の佛つくれいしの上」としている。特に上五が「陽炎の」となっている点の特異である。しかし「丈六の佛」というならわかるが、「陽炎の佛」では意味をなさない。「佛」の句は早期に捨てられた句案であり、これら「かげろふや」「陽炎の」「佛つくれ」などの異同は、芭蕉の推敲によるものではなく、誤伝か筆写のさいの誤りによるものと思われる。

(三)「丈六」の句については、上五を「丈六の」とするものと、「丈六に」とするものがあり、その推敲の先後が問題となる。土芳は、蕉翁句集草稿、蕉翁文集、三冊子などで、一貫して「丈六の」の句形を挙げている。しかも『蕉翁句集草稿』では、「白船に

ハ、丈六に、と有。の、也」と注して、『泊船集』（元禄十一年刊）が「丈六に」としていることをわざわざ指摘して、「丈六の」であるべきことを主張している。「丈六の」は誤伝とされたこともあるが、おそらく土芳は、芭蕉から「俳」と「丈六」の両句を直接吟じ聞かされた一人であつたにちがいない。その時、芭蕉が示した句形が、確に「丈六の」であつたわけである。なお『笈日記』がやはり「丈六の」の句形で掲げているのは、支考が元禄八年四月伊賀を訪ねて、土芳からこの句を取材したためである。

土芳の『蕉翁文集』（宝永六年成）には、やはり「丈六の」の句形を持つ俳文「伊賀新大仏之記」を収めるが、その文章は、発句を「丈六に」とする。『笈の小文』の本文に比べて、明らかに推敲の前後階の様相を示している。したがって発句も、「丈六の」（蕉翁文集）が「丈六に」（笈の小文）よりも先行する句形とみられる。

初案「丈六の」が、再案「丈六に」と推敲された時期については、元禄三・四年ころとする見方もあるが、貞享五年の伊勢下向中とみるべきであろう。『蕉翁全伝付録』に、この句を次のように記している。

#### 阿波大仏

丈六にかげろふ高し石の跡、

前述のように、この句はもと、伊勢滞在中の詠草と合わせて同一懐紙に染筆されていた真蹟である。その伊勢の句九句の中には、伊勢を辞去するさいの詠吟である「裸にはまだ衣更着の嵐哉」という句が記されていない。芭蕉は、伊勢で詠んだ句のうちから、伊勢当番直後参宮時の「何の木」の句と、辞去時の「裸には」の両句を並記し、両句にかかわる前書を添えた真蹟を遺している。しかも同類

のものを幾点も書いた形跡がある。つまり、「裸には」の句は、伊勢旅行を記念する代表句の一つであつた。全伝付録所収の懐紙が、伊勢で得た句のほとんどを掲げながら、「裸には」の句を欠いているということは、この句が作られる以前、伊勢滞在中に揮毫したものであることを物語っている。したがって、新大仏寺に参詣して上野に戻つた当時は、土芳が強調するように「丈六の」であつたが、ほどなく伊勢に下り、同地逗留がおわりに近づいたころ、この懐紙をしたため、そのさいに、おそらく「丈六に」と改めたものであろう。

またその折、座五についても再考し、試みに「石の跡」としてみたのであろう。二か所にわたつて改変していることから、たんに近作を再録するのではなく、染筆のさいに句を全体的に吟味、推敲したことを思わせる。「石の跡」は、遺跡の石、廢墟の石であることを言おうとしたものであろう。しかしたとえば「寺の跡」ならともかく、「石の跡」では、かつては堂塔の礎石や石の台座があつた跡とおぼしいが、今はその石すらも失せてしまつている情景と受けとられなくもない。それに比べて「石の上」は、何の石か、前文がないとやや不分明ならみなしとしないが、「陽炎高し」にもよく呼応して、まずは穏当な表現と言えよう。結局「石の上」に落ち着く（伝真蹟懐紙・芭蕉庵小文庫・笈の小文）ゆえんである。

なお先にも触れたとおり、日人筆写の『芭蕉翁全伝』には、「丈六の陽炎高し砂の上」とある。「砂の上」が杜撰であり、「石の上」であるべきことは、前文に照らしても明らかである。

四「丈六の陽炎高し」のばあい、「丈六の」は「陽炎」にかか。「丈六の」が陽炎の高さを指すものとすれば、丈六仏ほどの高

さの陽炎が（高し）の意となる。しかしそれでは、志田義秀氏が説くように、「丈六の」に対して「高し」が蛇足の感をまぬがれない。そこでこれを「丈六に陽炎高し」と改めると、「丈六に」は「高し」にかかり、丈六仏ほどに陽炎が（高し）、の意となる。それゆえ後者は句法として巧みであると、志田氏は評価している（『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』六四頁）。

しかし、「丈六」を陽炎の寸法の形容と解する限り、「高し」が重複感を伴うことでは、「丈六の」でも「丈六に」でも五十歩百歩というものであろう。別案「かげろふに佛つくれ」の句案を参看すると、「丈六」は陽炎の高さというより、燃えさかる陽炎の様態を主に指して言ったものと思われる。燃えさかる陽炎——それ自体虚構であることは先に見たところであるが、まぼろしの如くゆらめく陽炎の裡に丈六仏の佛を見た、と言っているのである。たしかに「丈六の陽炎高し」では直接には陽炎の寸法を言ったものと解されやすいかもしれない。その点「丈六に」とすることによって、丈六仏の莊嚴さを以て、丈六仏の莊嚴さに、といったほどの意であろうことが理會しやすくならう。なお「高し」に、ありし日の尊像を讃仰する作者の心情がこめられていることは言うまでもない。

「ギヤマンの如く豪華に陽炎へる」（茅舎）、「新薬師寺・金堂のくづをるゝごとかげろひぬ」（かけい）などの俳句を引くまでもなく、燃え盛る陽炎は、まさに絢爛豪華というべき趣きを呈するところがある。新大仏寺は、草深い田舎にしては珍しく規模の壮大な寺院であった。『おくのほそ道』瑞巖寺の条の表現を借りれば、五百年の昔、重源創建の当時は「七堂薨改りて、金壁莊嚴を輝、仏土成就の大伽藍」であったはずである。芭蕉は早春の寺跡に立って、枯

れ草になかば埋もれた大仏の台石の上に幽かに動く陽炎を借りて、まばゆいばかりの白昼夢を見たのであった。一句は、そうした心象風景に托して、失われたものへの熱い懐古の情を詠んだものにほかならない。